出典:「14歳からの人生学」 PHP 2008年3月臨時増刊号

生涯、問い続けていくべき問い

取材・文　小原田泰久／写真　永井浩

田坂広志（たさかひろし）

シンクタンク・ソフィアバンク代表

1951年生まれ。東京大学大学院修了。多摩大学大学院教授。'90年、日本総合研究所の設立に参画し、数々のベンチャー企業や新事業を育成する。著書に『人生の成功とは何か』『なぜ、働くのか』『仕事の思想』（以上、ＰＨＰ研究所）などがある。

「人生の成功」とは何か

いま、世の中には、安易な「成功論」が氾濫し、書店には「成功の秘訣」「成功の条件」「成功の方程式」といったタイトルの本が所狭しと並んでいます。しかし、そこで語られるのは、いわゆる社会通念としての「成功」です。人生において、他人よりも金を儲けること、出世すること、有名になること。それが「成功」であると、我々は信じ込み、いつも競争に駆り立てられています。

逆に「誰にでも優しい心で接する人になる」ことを人生の成功とする成功論はありません。それは、社会通念上の成功ではないからです。

アメリカの教育の世界に、味わい深い言葉があります。二つの言葉です。

Find your own uniqueness.

（あなたにとっての「あなたらしさ」を発見しなさい）

Define your own success.

（あなたにとっての「人生の成功」を定義しなさい）

これは、社会通念に囚われない生き方を教える言葉です。すなわち、百人の人間がいれば、百通りの個性があり、百通りの成功の定義がある。そのことを教えているのです。

なぜなら、社会通念での成功には、落とし穴があるからです。それは競争社会での勝者となることを成功と定義しているため、多くの人々が、その成功を求めて競争し、しかし、一握りの勝者しかその成功を得られない結果となるからです。そして、敗者は、深い敗北感と無力感を味わうことになる。

また、人生においては、こうした敗北だけでなく、失敗や挫折が、必ず待ち構えています。多くの成功論には、「努力すれば必ず成功する」と書いてありますが、どれほど努力しても、失敗し、挫折するときはあります。それが人生の真実ではないでしょうか。

それにもかかわらず、安易な成功論に染まってしまうと、実際に敗北や失敗、挫折に直面したとき、自分を支えることができなくなる。大切なことは、安易な成功を夢見て、成功の秘訣や法則を学ぶことではなく、敗北や挫折に直面したとき、自らを支える思想を持っていることでしょう。

では、いかなる思想が、自らを支えるか。

「成長」の思想です。

私にとっては、それが、自らを支える思想です。もし、社会通念を前提とするならば、人生において、「成功」は約束されていない。しかし、「成長」は約束されている。どのような敗北や失敗、挫折に直面しようとも、人間は必ず、

それを糧として「成長」していくことができる。私は、両親の人生と、私自身の人生から、そのことを学びました。

だから、私にとっての「人生の成功」の定義を問われるならば、「命あるかぎり、成長していくこと」。その生き方ができるならば、それは、素晴らしい人生であると思っています。

勝ち抜くことの厳しさ、そして空しさ

私が、こうした思想を抱くようになったのは、両親の生き方が大きな影響を与えていますが、同時に、子供の頃の体験があります。

私は、子供の頃、東京の千代田区に住んでいたことから、番町小学校と麹町中学校に通いました。この二つの学校は、当時、いわゆる進学コースとされており、成績優秀な子供たちが数多く越境入学してきていました。

そんな学校に通っていたにもかかわらず、私は、あまり勉強が好きではなく、かといって特にリーダーシップがあったわけでもありませんでした。また、何か人生について深く考えていたわけでもなかった。平凡な子供でした。

両親は、小さな企業を経営していました。父は誰からも好かれる人の良い人物であり、母は体が弱かったにもかかわらず、一生懸命に父の仕事を支えなが

ら、家庭を大切にしていました。しかし、子供ながら、父や母が会社の経営で、資金繰りや人間関係など、骨身を削る苦労をしている姿を見てきました。

ただ、その記憶の中で深く心に残っているのは、父と母が、いつも一生懸命に生きていたことです。どんな苦労や困難があっても、決してそれから逃げることなく、いつも真摯に自分の人生に向き合っていた。その姿が、最も深く心に残っています。そして、その姿が、私に大切なことを教えてくれました。

「人間は、何のために、一生懸命に働くのか」

「苦労や困難の多い人生を、なぜ、精一杯に生きるのか」

父と母は、その後姿を通して、無言で、そのことを教えてくれました。

そして、あまり説教じみたことを語らない父母でしたが、二つの言葉が心に残っています。一つは、自らに語るようにつぶやいた「人間、成長の道を歩み続けなければ」という言葉、一つは、子供に語った、「世の中に貢献する人間になってほしい」という言葉です。

いま振り返れば、父母も、人間としての未熟さを抱え、成長の道を歩み続けていたのだと思います。しかし、親だからといって、子供の前で完璧である必要はありません。未熟な一人の人間として、成長を求め、一生懸命に生きる姿を見せてくれた。その生き方の大切さを、後姿を通じて教えてくれました。

そして、やはり、父母には、子供への深い愛情がありました。私の人生の岐路において、父が伝えてくれた温かい思い。母が命がけで示してくれた覚悟。その深い愛情が、私を導いてくれました。

一方、学校の生活においても、人生の諸相を学びました。それは、競争社会で勝者となることの厳しさと空しさです。優秀な子供たちが越境入学してくるような学校でしたから、そこで勝ち抜くというのは大変なことでした。そして、受験を目的とした勉強も好きではなかった。だから、これからの競争社会で勝ち抜くという人生の厳しさを、子供心に感じたわけです。そして、同時に、競争社会で勝ち抜いていくことの空しさも、当時から感じていました。例えば、誰かが試験で成績が落ちると、ライバルの誰かが密かに笑うという雰囲気が好きではなかったのです。

だから、子供の頃から、人に勝つこと

に喜びを感じられませんでした。なぜなら、自分が勝った瞬間に、誰かが負けるわけです。誰かの敗北感と引き換えに、自分の幸福感を得るという構図が好きではなかったのです。その敗者の姿は、自分の姿であったかもしれない。そう考えてしまうのです。だから、いつの間にか、私は「人と競争しない生き方」「人と自分を比較しない生き方」を身につけたように思います。

むしろ、いつの間にか身につけたのは、みんなが幸せを感じられるにはどうすればよいかという発想です。それは、特に、会社に入ってから明確になりました。「出世」をめざすかぎり、勝者と敗者が生まれる。しかし、仕事を通じて「働き甲斐」をめざすならば、自分も仲間も、みんながワクワクして働ける。そして、「成長」をめざすならば、自分も仲間も共に成長していける。それが、後年の私の『仕事の報酬とは何か』という著作の思想になったのだと思います。

苦労や困難が自分を成長させてくれる

そして、この「成長の思想」を持つと、実は、人生の風景が変わるのです。

競争に勝ち抜くことを人生の成功と考える「勝者の思想」を持つかぎり、人生の苦労や困難、失敗や敗北は、できるだけ避けたいネガティブな出来事ですが、「成長の思想」を持つと、その出来事のポジティブな意味が見えてきます。

大リーグのイチロー選手に、次のようなエピソードがあります。

イチロー選手が、アスレチックスのハドソン投手に何試合も抑え込まれていたとき、あるインタビュアーから「彼は、あなたの苦手なピッチャーですか」と聞かれました。この問いに対して、イチロー選手はこう答えたのです。

「いえ、そうではありません。彼は、私というバッターの可能性を引き出してくれる、素晴らしいピッチャーです」

これは、まさに深い人生論だと思います。

人生で与えられる苦労や困難とは、自分という人間の成長の可能性を引き出してくれる素晴らしい出来事である。「成長の思想」の根底には、その肯定的な思想があるのです。

実際、過去を振り返り、「自分は、いつ成長しただろうか」と考えるとき、それは決して、順調な時期や幸運な時期ではなかったことに気がつきます。むしろ、逆境の時期、不遇の時期にこそ、人間として成長していることに気がつきます。仕事が壁に突き当たり悪戦苦闘したとき、人間関係の摩擦の中で心が軋んだとき、そういうときにこそ、我々は、人間として成長しているのです。

そして、この「成長の思想」を身につけると、苦労や困難を前向きに受け止める力が身につくだけでなく、「意味」を感じ取る力が研ぎ澄まされてきます。

例えば、ある進路に進もうとして、ある大学の試験を受けたとします。一生懸命に努力して試験を受けたのですが、残念ながら不合格になった。それは、表面的に見れば、人生のある局面での敗北です。しかし、「成長の思想」を持つと、その出来事の捕らえ方が深くなります。「この不合格は、何を意味しているのか」「この出来事は、自分に何を教えてくれようとしているのか」。そうした深い思索を通じて、「ああ、この不合格は、自分が本当にこの進路を歩みたいのか、その信念を問うているのだ」などの思いや、「そうか、この不合格は、別な進路を歩めとの声なのだ」との気づきが生まれることがあります。

また、この「成長の思想」を抱くと、人生における一見、無関係に思える出来事の中に、深い意味を感じ取る力が身につきます。

例えば、ある重要な会議に、電車の事故で遅れてしまう。それは一見、自分には責任のない不可抗力に思えることなのですが、なぜか、最近の自分の心の姿勢に警鐘を発してくれている出来事に思えるときがあります。

このように、「成長の思想」を抱くことによって、我々が人生の出来事を見つめる視線は深くなり、その意味を考える「解釈力」が豊かになっていきます。そして、そうした歩みを続けていると、いずれ、人生の様々な出来事を通じて、何かが自分を導く「声」が聞こえてくるような感覚を覚えるようになります。

私自身、まだまだ未熟な人間であり、道半ばで修行を続けている人間ですが、五十六歳という歳を迎えて、素朴に信じられるようになった言葉があります。

「人生、すべての出来事に、意味がある」

「人生、起こることは、すべて良きこと」

昔、母が、何か、辛いことがあったときだったと思いますが、ふとつぶやいた言葉が、いまも、私の心に残っています。

「人生は、不思議な力に導かれているのだからね」

その母が他界して十五年の歳月が経ちました。父が他界して十二年。

いまは、父と母が、その不思議な力となって、自分を導いてくれていると感じられてなりません。

その不思議な力に導かれた、人生とは何か。

その人生を、いかに生きるべきか。

それは、答えのない問い。

しかし、それは、生涯、問い続けていくべき問いなのでしょう。